

1. 評価結果概要表

【評価実施概要】

事業所番号	0472100080		
法人名	社会福祉法人 大泉会		
事業所名	グループホーム ふるさと		
所在地 (電話番号)	刈田郡蔵王町宮字下別当72 (電話) 0224-32-2811		
評価機関名	特定非営利活動法人介護の社会化を進める一万人市民委員会宮城県民の会		
所在地	仙台市宮城野区榴岡4-2-8 テルウェル仙台ビル2階		
訪問調査日	平成 19 年 8 月 24 日		

【情報提供票より】(19年 7月 1日事業所記入)

(1) 組織概要

開設年月日	平成 14年 5 1日
ユニット数	2ユニット 利用定員数計 18人
職員数	人 常勤 人, 非常勤 人, 常勤換算 人

(2) 建物概要

建物形態	○併設/単独	○新築/改築
建物構造	鉄筋 造り 階建ての 1階 ~ 1階部分	

(3) 利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	23500円	その他の経費(月額)	光熱水費16000円
敷金	有(円) ○無		
保証金の有無 (入居一時金含む)	有(円) ○無	有りの場合 償却の有無	有/無
食材料費	朝食	円	昼食 円
	夕食	円	おやつ 円
	または1日当たり 1000円		

(4) 利用者の概要(7月 1日現在)

利用者人数	17名	男性	4名	女性	13名
要介護1	1名	要介護2	7名		
要介護3	6名	要介護4	3名		
要介護5	0名	要支援2	0名		
年齢	平均 87.2歳	最低	81歳	最高	92歳

(5) 協力医療機関

協力医療機関名	医療法人浄仁会大泉記念病院
---------	---------------

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

ホームの設立運営法人である社会福祉法人大泉会の母体は、医療法人浄仁会である。浄仁会は同法人が設立した大泉記念病院の110周年記念事業として93年に青麻山の丘陵地帯に特養ホーム楽園が丘を開設した。「病院で治療を受けて退院した人が不十分な家庭環境のもとで生活し再三にわたって入退院を繰り返し亡くなっていくのが忍びがたく、現世に楽園を建設したい」との思いが開設の動機である。このホームはその思いの延長線上に開設された。ホームの職員はこの創設の理念を心して業務に専念し、入居者の尊厳と人格、主体性を尊重した介護に徹している。大泉記念病院が入居者の医療上の支援を担い、理事長(医師)が毎週1回ずつホームの入居者を回診している。近在の住民の方々との信頼関係も厚く、山菜や農作物の差し入れが頻繁にあり、ホームではそれらの方々の介護相談にも丁寧に応じている。

【重点項目への取り組み状況】

重点項目 ①	前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4)
	前回の評価では、特に改善を要する事項の指摘はなかったが、環境改善、健康管理、安全確保、最期の看取りの実践、積極的な外出の支援などへの取り組みに力を注いでいる。
重点項目 ②	今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4)
	① 運営者、管理者、その他の職員のすべてが、外部評価の意義やねらいを理解している。今回の自己評価に当たっては、すべての職員に「自己評価票」を配付し、それに記入されたものを管理者がまとめている。外部評価の結果を公表し、評価で見いだされた課題の改善計画をたて、その実現に取り組んでいる。
重点項目 ③	運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4, 5, 6)
	まだ運営推進会議を開催していない。現在は委員の選任中である。「準備が整い次第、会議を開催し、サービスの向上に活かしていきたい」としている。
重点項目 ④	家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7, 8)
	家族が訪問したときには声を掛け、必ず入居者の状況を伝えるとともに、入居者のことについて話し合っている。すべての家族に対して、毎月1回程度は手紙や電話で入居者の状況を伝え、意見や不満や苦情を聞いている。家族の苦情などに対しては、第三者を含む苦情解決委員会での原因を探り、解決策を検討して公表し、サービスの質の向上に活かしている。第三者の苦情受付先を本人や家族に周知している。
重点項目 ④	日常生活における地域との連携(関連項目:外部3)
	ホームは町内会に加入していないが、入居者は地域社会の行事や選挙などに積極的に参加しているし、近在の方々がホームの行事に参加している。ボランティアが、調理、腹話術、草刈り(町長自らも)、雪掻きなどに来訪している。「ふるさとだより」と「楽園が丘だより」を発行し、「楽園が丘だより」を町内会を通じて蔵王町のすべての家庭に配付してもらっている。地元中学校や仙台大学の地元学生などとの交流も盛んで、職場体験学習や介護実習を受け入れている。

2. 評価結果（詳細）

（ 部分は重点項目です ）

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
I. 理念に基づく運営					
1. 理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	ホームには法人の理念と職員の話し合いの中から作り上げたホーム独自の理念があるが、地域密着型サービスの意義を取り入れた見直しを行っていない。「地域密着の意義を考え、今後は年に1回は話し合いを持ち、現状にあった理念を検討したい」としている。	○	地域密着型サービスの趣旨を踏まえて理念を見直しするように要望する。その際には、従前と同様にすべての職員と話し合いの場を持っていただきたい。
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	日常的には職員間で理念についての話し合いを持っていないが、理念の内容をすべての職員が理解し、日々のサービスの提供に当たってはその理念を活かしている。「今後は理念についての話し合いの場を持ち、職員がその理念に基づき実践の中に活かすように取り組みたい」としている。	○	職員は日常的に理念を省み、それに照らして日常業務を遂行することが大切である。今後の方向性には共感できるので、その成果を期待する。
2. 地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	ホームは町内会には加入していないが、入居者は地域社会の行事(祭、盆踊り)や選挙などに積極的に参加しているし、近在の方々やホームの行事に参加している。ボランティアが、調理、腹話術、草刈り(町長自らも)、雪掻きなどに来訪している。「ふるさとだより」の他、「楽園が丘だより」を発行している。	○	「ホームの行事の開催に当たっては、前もって近隣の方々に周知し、より多くの人達が訪れてくれるように努めたい」としているため、その取り組みを期待する。
3. 理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	運営者、管理者、その他の職員のすべてが、外部評価の意義やねらいを理解している。今回の自己評価に当たっては、すべての職員に「自己評価票」を配付し、それに記入された内容を管理者がまとめている。外部評価の結果を公表し、評価で見いだされた課題の改善計画を立て、その実現に取り組んでいる。		
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	まだ運営推進会議を開催していない。現在は委員の選任中である。「準備が整い次第、会議を開催し、サービスの向上に活かしていきたい」としている。	○	運営推進会議の早急な開催を期待する。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	行政に対して、ホームから事業への理解と支援を要請している。町の地域ケア研修に参加したときや電話で、町の保健福祉課や地域包括支援センターなどと連絡や情報を交換している。行政側の姿勢も積極的で、今回の外部評価には二人の担当者が同席している。		
4. 理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	家族が来訪したときには声を掛け、必ず入居者の状況を伝えるとともに、入居者のことについて話し合っている。すべての家族に対して、毎月1回は手紙や電話で入居者の状況を伝えている。入居者の金銭管理については、家族と口頭で取決め、毎月1回は書面で報告して、確認の署名を貰っている。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族の意見や不満や苦情を手紙や来訪時に聴取している。家族の苦情などに対しては、その発生の原因を探り、解決策を検討し、公表してサービスの質の向上に活かしている。外部の苦情受付先を本人や家族などに周知し、意見や苦情を伝えることができることを、繰り返し説明している。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	入居者と職員のなじみの関係を重視し、異動を最小限に抑えている(この1年間に常勤職員の異動は無かった)。職員が交代する場合には、入居者の心理的な負担にならないように配慮して、異動する職員がいさつしたり、日常の会話のなかで説明するようにしている。		
5. 人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員には日常的に学ぶことを推奨し、非常勤の職員にも研修などに参加する機会を設けている。すべての職員が研修内容を共有できるように報告する機会を作っている。同一法人内で毎月1回、研修会を開催している。職員一人当たりの入居者の数(入居定員)は1.24人となっている。		
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	ホームは、グループホーム連絡協議会に加入している。同協議会から各種情報の提供や研修会の開催の案内があり、それらを活用している。他のグループホームとの相互交流や施設見学会も行っており、日々のサービスや職員の育成に役立つ実践的な交流や連携が図られている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	入居予定者には職員が必ず家庭を訪問して実態調査を行っている。本人には何度か入居前の訪問を求め、短時間でもホームで過ごしてもらって職員やサービスに徐々になじめるようにしている。また、本人とその家族とよく話し合っ、本人が納得した上で入居してもらえるように支援し、入居の時期を調整している。		
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしなが喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	入居者の得意な分野で力を発揮してもらい、職員はそれに感謝の気持ちを表している。職員が入居者から生活の技や生活文化の大切さを教えてもらう場面がある(フキやワラビの塩漬けの仕方など)。さらに「入居者の方々との対話、傾聴、信頼関係の確立に、今まで以上に力を入れていきたい」としている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	職員は入居者の思いや暮らし方、希望や意向の把握に努めている。本人の「いま」や「これまでのこと」をよく知っている家族などを交え、本人の視点にたって支援策を話し合っている。ユニットふる里では「一人一人がもっとゆっくり、楽しく、有意義に過ごせるように支援していきたい」としている。		
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	日頃のかかわりのなかで本人やその家族の思いや意見を聞き、ホーム以外の関係者(特に医師)の意見も取り入れて、必要な支援を盛り込んだ介護計画を作成している。介護計画を家族に渡し記名押印によって同意を得ている。得られた情報を職員間で共有している。		
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	入居者の急変時や退院時には当然、必要に応じて介護計画を見直している(最低3か月に1回)。見直しに当たっては本人とその家族及び関係者(特に医師)と話し合い、前の計画を評価分析しそれらに基づいて介護計画を作成している。見直した介護計画にも記名押印により家族の同意を得ている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
3. 多機能性を活かした柔軟な支援					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	入居者の通院や特別な外出などで支援が必要な場合には、原則的には家族が対応し、急な通院時の搬送や入院時には家族が来るまで職員が付き添い、介護したりして、それぞれが満足するように努力をしている。近在の高齢者が、ショートステイやデイサービスを望む場合には、併設している特養ホームを利用している。		
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ホームはかかりつけの医師や医療機関と良好な関係を築いている。本人やその家族が希望するかかりつけの医師や医療機関に受診できるように支援している。ホームは入居者が通院する場合の介助方法、情報の伝達方法について家族と話し合い合意を図っている。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	入居者が重体に陥った場合の対応について早期から関係者間で話し合い、方針を統一している。入居者の状況の変化に応じて繰り返して話し合い、段階的な合意に努めている。家族や医師などと話し合っ、入居者の終末期の対応方針を定めている。		
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
1. その人らしい暮らしの支援					
(1)一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	職員の入居者への言葉掛けや態度のかかわり方がゆったりとしており、声の調子は柔らかである。職員は入居者を尊重して呼び掛け、本人の承諾を得た上で居室に入出入りしている。スピーチロックは見られず、個人の記録やメモなどを人前に放置していない。入居者に「ダメといったらダメ」が理事長の教えである。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入居者の生活習慣に配慮して、起床、入浴、食事、就寝などの日課的な行為を、本人なりの速さで行えるように、柔軟に対処している。一人一人の入居者の「その日にしたいこと」を把握し、入居者が主人公となって暮らせるように支援している。排泄時には、同性の職員による介助を原則にしている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	併設する特養ホームの管理栄養士が入居者のし好を考慮して旬の食材や新鮮な物を取り入れた献立を作成し、食材を一括して購入している。ホームの行事(花見、芋煮会、バーベキューなど)に合わせて独自の食事を作る事も有る。入居者と職員が同じ食卓で同じ食事を和やかな雰囲気ですべてしている。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	浴室はほぼ毎日利用できる。入居者のこれまでの生活習慣や好み、希望を聞いてその人に合った入浴ができるように支援している。入浴を拒む人に対しては、言葉掛けや対応を工夫し職員の連携によって一人一人に合わせて入浴を支援している。入浴時には同性の職員による介助を原則としている。		
(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	それぞれの入居者が、自分の役割や楽しみごとを作れるように、また気晴らしの機会をつくれるように職員が働き掛けている。職員は入居者の生活習慣、希望、有する力、発揮したい力を踏まえて支援している。入居者の主な楽しみごととしては裁縫、園芸、農作業、読書、新聞読み、塗り絵などがある。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	外出を希望する人には職員がなじみの店や場所に出掛けられるように支援している。入居者が歩行困難な場合には、車や車いす、シルバーカー(本人所有)などを利用して、戸外へ出ることを積極的に働き掛け、散歩の場合には職員が付き添っている。加齢に伴い外出を希望する人が少なくなって来ている。		
(4) 安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	日中は居室や玄関や門扉にかぎを掛けていない。職員はそれぞれの入居者の外出の癖や傾向をつかんで対応している。近在の方々にも協力を求め、見守りや声掛け、ホームへの連絡を要請している。玄関にチャイムがあるが、入居者を監視してしまうような事は無い。		
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	災害対策にかかるマニュアルを作成し、すべての職員に周知している。また、地域社会の方々の参加と協力を得ながら、毎年2回以上の避難訓練を実施している(夜間を想定した避難訓練を含む)。避難通路の安全確保、消火器や火災通報装置の点検を定期的に行っている。職員の非常呼集体制を検討している。	○	職員の非常呼集体制の早急な確立が望まれる。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
(5)その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	それぞれの入居者の食事の摂取量と水分の摂取量を記録している。入居者の嗜好を把握して献立に取り入れ栄養バランスにも配慮している。献立は併設の特養ホームの管理栄養士が作成し、入居者の栄養状態への指導や助言に当たっている。体重を毎月1回あて測定している。		
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1)居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	照明や日差しがまぶしかったり、暗かったりしていない。適切に換気され、臭気や空気のよどみがない。それぞれの居室や共有空間などの温度を調整し、加湿器を各ユニットに1台ずつ配備して、湿度を適切に管理している。入居者にとって使いやすく造作し、なじみのものや使いやすいものを置いている。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	なじみのものを持ってきてもらえるように家族に働き掛けているので、入居者は寝具、仏壇、湯沸しポット、テレビ、こたつなどを持ち込んで、自分に適した居心地のよい居室(16.7㎡、便所、洗面化粧台、整理たんす、押し入れ付き)を作っている。ホームではベッド、照明器具、冷暖房装置などを提供している。		